

移二回 八月七日

官房第2301号ノ二ツ以テ信号書之義ヲ付テ移牒之
趣ヲ承知ス。曩ニ陸軍省ヨリ海軍信号書及海陸
信号書譲受ニ付有照會者ニシテ讓進ニ付テ
策陸軍省ハ讓渡ニ付ヨリ下ノ制守備隊司令官及
分配之事ニ付有照會者ニシテ協成相濟ト云々
及在田長也

明治三十七年八月七日

部長

大長

大木 滋

移二 (州) (6) 丙 八月七日

。傳書鶴

先般竹敷ニ傳書鶴飼養之我存海会秘集
二七八号ノ巻ヲ以テ及由昭会置更外在ッ都合ア
リ当分飼養セサ九奉ニ致更各由了更有之度
次段申退更也

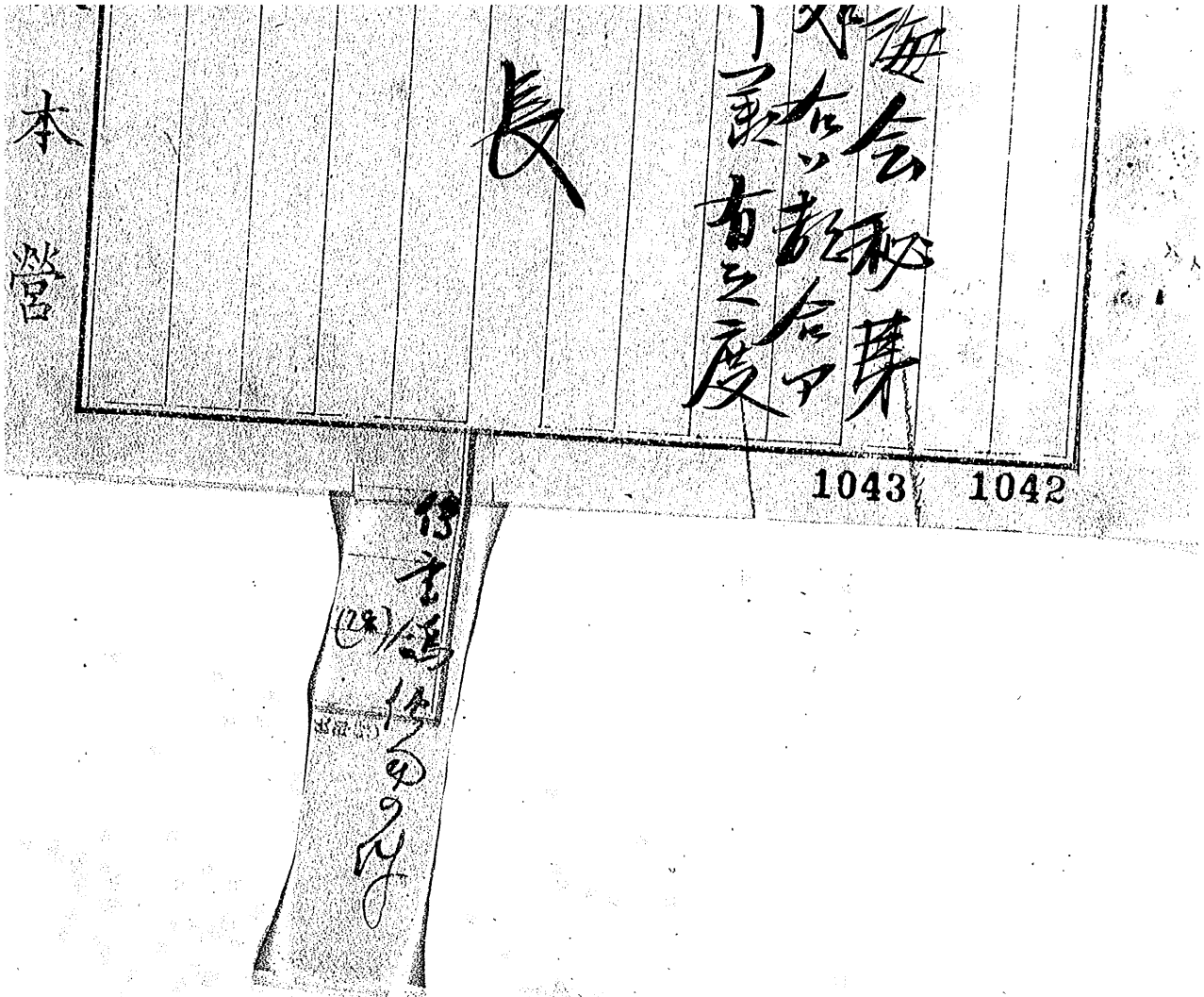
昭和廿七年八月七日

部 長

佐世傳長宛

大本營

1043 1042



移三(四)月七日

○真水供給

電信 (暗号)

艦隊目下真水欠乏ノ趣キニ付之ヲ供給ス
ルコト必要ナリ現在ノ運送船ヲ以テ真水ヲ艦
隊ニ供給シ得ルヤ至急取調返電アリ
明正廿七日 前十時三十分 癸

佐世係長官宛

部長

大本營

移三(四) (六)丙

八月八日

○真水供給

電信(暗号)

由未得几限り真水ヲ艦隊ニ供給セヨ

明作廿七号八月 前九時五分発

部長

佐世保鎮守府司令官宛

大本營

移三(六)兩 八月八日

商船購入

太平洋郵便船會社後船 午ヤイハ船ヲ換セシメ
黃処本船々体堅牢ニシテ是ニ武装スルトキハ速洋艦
代用ニ適当ノモノニ有之就テ今取横濱ニ入港致居美
奈及際軍艦不足ノ折柄最モ必要ニ付本船至急購入相
成美標脚取斗有之度及脚商議美也

明治廿七年八月八日

部長

海軍大臣宛

追テ本船構造及搭載砲數等ハ別紙ニ通リ有之也

大本營

本
營

此の口有之矣也

一應換せし
一舟の遊禪壺
一入港後居
至急に購入相

1047

1046

此の口有之矣也
72

移二(6)丙 八月九日

日本郵船株式会社汽船朝顔丸
右兵備品運搬之為ニ雇入有之友陸軍雇入之上ハ
當時海軍ニテ使用中之佐倉丸陸軍ニ於テ必軍
之趣ニ付亦代ニ軍ニ取斗有甚多及此等
敵也

七七甲八月九日

奉長

大島元

大木

移二 (6) 丙 八月九日

東京海灣長崎港口船舶出入規則別紙之海軍
及商船

明治廿七年八月九日

部長

大木

大木

東京海灣船舶航行規則

第一章 東京海灣内ヲ航行スル船舶及東京湾口ヲ通

過セトスル船舶ハ左ノ通り心得ベシ

第二章 走水ノ西南角破埼ト本牧浮標トヲ連絡スル一線

ト小柴埼ト上総人見山々頂トヲ連絡スル一線トヲ

以テ構成スル区域以内ニ於テ横須賀軍港ニ近接

スルヲ禁ズ

第三章 觀音崎ヨリ笠島ヲ徑テ劍崎ニ至ル線以内ニ於

テ浦賀港并ニ金田湾ニ入ルヲ禁ス

第四章 明金場ト富津場トヲ連結スル一線ノ以東ニ入

ルヲ禁ス

第五章 湾口ヲ概過セトスル船舶ハ海軍水雷嚮導船

ノ指揮ヲ得ルニ非サレバ浦賀港南側伊勢山下安

房國小ノ保ノ鼻トヲ連結スル線(附國半線)ノ以テ及

田戸崎ト猿島ノ北端トヲ連結シタル延長線(附国未定)

ノ以南ニ進入スルヲ禁ス

第三條 湾口ヲ通過セトスル船舶ハ第五條想像線

外ニ於テ進行ヲ止メテ尤ノ信号ヲヤスベシ

一 汽船 汽船ハ長汽笛三聲ヲ續奏シ帝國要港

水先旗ヲ揚リベシ

二 帆前船 帆前船ハ路衝ヲナシ帝國要港水先旗

ヲ揚クベシ

第七年 日出前日没後ハ東京湾口ノ航路ヲ許サズ

1053

長崎港船舶出入規則

第一條 長崎港へ出入スル船舶ハ海軍水路嚮導船

ノ指揮ニ従フベシ

第二條 長崎港ニ入港セシトスル内国普通船舶及外

国船舶ハ平瀬トエツユ瀬ヲ連絡スル線外ニ於テ

航進ヲ止メ左ノ信号ヲナスベシ

一 汽船 汽船ナレバ長汽笛三声ヲ續奏シテ

一 航前船

国要招水先旗ヲ掲クベシ

航前船ナレバ臨海力ナシ帝國要招水先旗ヲ掲クベシ

第三条 長崎港ヨリ出港セシトスル内国普通船舶及外

国船舶ハ女神鼻トシケルノ山ヲ津佐ニシテ一線内

ニ於テ航進ヲ止メ第二条ニ規定シタル信号ヲナス

ベシ

第四条 日没ヨリ日出迄ハ一切艦船ノ出入港ヲ禁止ス

第五卷 大申瀬戸及深掘香焼島間ノ水道ハ晝夜ト

七一 切艀船ノ通航ヲ禁ム

大木 營

大移 (6) 丙

廿七年八月十日

訓令

訓令第八号

其府所管各通信船ハ鎮守府及艦隊間ヲ交代往復セ
シメ鎮守府并ニ艦隊所在地ニハ非常通信ニ備フル
為メ常ニ電艘ツ、アラシムベシ
明治廿七年八月十日

大本營

佐世保鎮守府司令長官宛

大本營

移二(6)丙 八月十日

日本郵船株式會社所有汽船神戸丸ヲ徵用シ海
軍病院船ニ充テ多ク乗取出シ相違無ク
乃長崎灣に泊ル也

明治七年八月十日

部長

海軍大臣

矢本啓

移三(四)丙

八月十日

相模丸武裝

運送船相模丸才左之通、兵裝之上、西海
在下交換西海艦隊二附屬英艦御取斗
有三度及御商議美也

明治廿七年八月十日

部長

海軍大臣宛

運送海丸、運送船二使用發度美也

相模丸兵裝

一前年十二挺先砲

一短七五挺先砲

一四十七三、重連射砲

二門 吳

二門 吳

二門 吳
二門 吳
二門 吳

一 小 執

右使用ニ西女スル兵員モ候テ配衆相成度ニ美

五 格 候

初三(四) (6)丙

八月十日

西京丸ノ備砲

今般西京丸へ装載スル中士切原射砲二丁ト定
 ノ造兵廠ニアル身五五号砲ヲ採リ砲架ニ組
 ニアルモノヲ以テ同船ニ装載シ然シテ海令秘
 二九五号ノ砲ニ對スル所田倉之造兵廠試験用
 今日リ一ヶ月ノ後ニ所取計可相成砲架ヲ組
 之夕ニ光テ敵ノ被置ヲ度身般重テ友所
 商議美也

明治廿七年八月十日

海軍大臣宛

鉅長

右ノ書、在奥、傍原、西京丸、田倉所定ノ身、並、採、載、出、料、以、在、中、及、及、世、間、所、知、也、
 大目宛

初長

大本營

移二(丙)

八月十日

聯合艦隊及附屬船舶、兼組軍人軍属が、宛タル私
信ハ佐世保鎮守府送付し同鎮守府ニ控テ之ヲ取
得テ大通信船便ヲ以テ之ガ送達方取計ハ取致
此段及歩高商賣也

明治廿七年八月十日

部長

少中 古長

直而祭送者宛迄能載方左之通

長壽縣佐世保鎮守府行中

軍艦 松島

何之基也

大本營

移三 (6)丙

八月十二日

武装たし商船

日本郵船株式會社為船

同

横濱丸

同

東京丸

同

朝顔丸

同

薩摩丸

同

長六丸

同

西京丸

並に各船に先づ斯次武装之上に巡洋艦代用トシテ

使用致度見込ニ有之其各次改修ノ及御願

也

江戸神戶在ハ当分海軍病院船トシテ使用ス

見方三右之長也

明治廿七年八月十日

海軍大臣宛

部長

移二(丙)

八月十一日

汽船神戸丸三葉組居の船員之島津ハ外国
有之此等付可港出入難有致ハ三葉長崎港
ヲ以テ本船ニ考着局地ト陸反法然乃高松志
明治廿七年八月十一日

部長

海軍大臣
カキ

大 水 營

移二(6)丙 一月十日

日本郵船株式會社汽船西幸丸。人負配業方
海令秘第二九五号。一ノ以テ高商議。及置テ
所取ノ船長以下相當之人。負配業之事。ニ在リ
有之。夜更ニ及高商議也。

明治廿七年八月十日

部長

海軍大臣

大木 啓

移二の丙 八月十三日

運送船相模化ニ大砲使用ニ要スル兵員配乗
相模友吉海軍秘所三〇七号ノ電ヲ以テ及此旨
議置ル事トシ右ノ船長以下相模島ニ兵員配乗
之旨ニ示スル事トシ右ノ船長以下相模島ニ兵員配乗
明治廿七年八月十三日

部長

海軍大臣官房

大本營

1068 1067

本
營

長

共負配乘
以乃古高
負配乘

1068

1067

長

移二(丙) 八月十三日

軍艦海川工事一竣工之上ハ常備船隊ハ編入セシメ
ラシ候豫定ニ付在差上之無之探至急準備之報
内訓者之云乃在商隊外也
明治廿七年八月十三日

部長

山岡三良氏

大木

燃

移二(6)丙 八月十三日

徵發事務條例第七條中第一項に掲ぐの船舶中郵便
船に限り其通信ノ用ニ供スル旨ハ之ヲ借切ルルトテ得ル
有之抑モ本條ノ精神ハ琉球五島及對馬オノ如キ其便船
ニ借切徵用スル旨ハ郵便通信ノ途無之ヲ指示シタル義
ニシテ東京神戶或ハ横濱青森等ノ如キ船舶ノ便ニ據
ラケルモ郵便通信上ニ差支ルヤ其場合ニハ借切徵用ヲ爲シ
得ル義ト存候矣通信者ニ於テ甲地ヨリ乙地ニ至ル
郵船ハ何レ丸兩地ヨリ丁地ニ至ルハ何レ丸ト最モ前
約シ得ル少敷ノ船舶ヲ豫定シ其他ノ船舶ハ借切徵用
ニ差支無之様致シ通信長ハ海高取相成反

此段及格高議也

明治廿七年八月十三日

部長

海軍大臣

ナ
オ
港

初(四) (6)丙

八月十三日

○南船購入ノ商議

現今ノ我軍艦ハ其數寡ク墮テ勢カモ亦々微弱
 ナルニ今夜敵門ノ結果ニ依リテハ多クノ損言テ
 蒙リ使用ニ差支テ生スル必然ニ付此際別紙商議
 テ武装ニ巡洋艦代用トシテ補充スルハ最モ必要
 ニ有之ヌ現今商船ニシテ武装ニ適スルモノハ
 陸軍ニ於テモ必要トシテハ右海軍ニテ使用スル
 為メ生スル不足之商船ヲ陸軍ニテ御買入レ有之
 ヌ概ヨリ御申立ニ相成度矣殿及御方商議
 候也

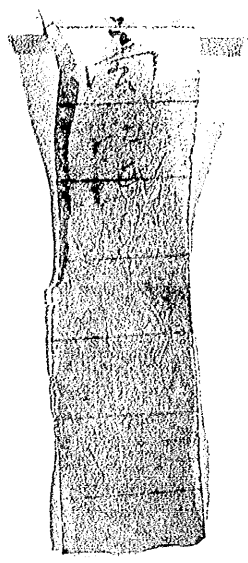
明治廿七年八月十三日

樺山海軍少佐 船長

1073 1072

亦々微弱
 損言子
 紙筒船
 最モ必要
 入ルモノ
 使用スル
 貝入レ有之
 脚分儀

1073 1072



海軍大臣宛

1074

移二(6)丙 八月十日

今般海軍病院に於て徴用相成り汽船神丸
旗章之義に海軍旗章條例雛形海軍
病院旗章不用赤十字旗章掲用たる事と法取
り方之交及高院也

明治廿七年八月十日

部長

海軍大臣

大本 啓

1076 1075

海軍大臣
印

大本營

長

此後船神丸
難航之海軍
六七年之法取

1076 1075

此の如く
船神丸の
六七年の
法取

移二(丙) 八月十四日

土洋商船合資會社汽船土洋此ヲ以テ兵備出
運搬之為大廉入者之友廉入之上ニ膏時海軍ニ
使用中之在倉凡ニ陸軍ニ方於テ必要之類ニ
船ト更代ニ事ト宜取斗相成ニ去股及高橋也
明治廿七年八月十四日

部長

海軍大臣

大本營

移三(四)雨

八月十四日

。真水供給

朝顔丸

右聯合艦隊へ専ら清水供給之為ノ御座入相成度
御座入之上、佐世保鎮守府ニ附屬ス様御取斗
有之度歟及及高議矣也
明治廿七年一月廿日

海軍大臣宛

新長

逕ニ監督將校及信等兵驅逐方也候也
御取斗有之矣也

大本營

秘記(6) 丙

二十七年一月十五日

○局外諸國通知

電報案 暗号

局外中立、布告ヲ通知シタル英吉利、葡萄牙、伊太利、和蘭、丁
抹皮、瑞典、蘇威、六ヶ國ヲ心得為ル通知ス

一月十五日

大臣

聯合艦隊司令長官

神鏡(女) 研

三十七年一月十日

○英艦隊ノ挙動南元伊軍長官ハ電訓

殊急艦隊ノ長官ニ電報ヲ傳達スル

英國艦隊ノ長官ノ申込及我艦隊ノ舉動上間接的参考ス

ノ件ニ就テ既ニ海軍大臣ヨリ刻急ノ通テ凡右ノ件ニ願慮ス
ル勿シ

一月十日

司令長

佐鎮長官

(6) 丙

八月十五日

作戰ノ大方針ヲ定ムル別紙、如シ然レモ季節ノ關係ニ依リ縦ニ海戰ヲ軍
有利ナルモ目下甲ノ場合ニ於ケル作戰ヲ開始スル能ハス因テ之ヲ明年氷雪
融解ノ期ニ譲リ今海戰ノ勝敗如何ニ拘ハラス假リニシ、場合ニ準據ミテ動作シ
以テ他日ノ作戰ノ為メ地歩ヲ右有シ置カントス

明治三十七年八月

大本營

參謀總長 熾仁親王

作戰大方針

茲ニ規定スル方針ハ作戰上ノ關係ヲ清韓ニ國ニ有スル場合ノ為メニス

我軍ノ目的ハ首力ヲ渤海湾頭ニ輸シ清國ト雌雄ヲ決スニ在リ朝鮮ノ兵力ハ之ヲ眼中ニ置カ
ス

此目的ヲ達スルト否トハ一ニ海戰ノ勝敗ニ因ル假令海戰我ニ不利ナル場合ニ於テモ陸軍ハ飽
マテ朝鮮ヲ占領ス

因テ作戰ノ經過ヲ二期ニ大別ス

第一期 第五師團ヲミテ朝鮮ニ牽制動作ヲ為サシム

我艦隊ハ進シテ敵ノ艦隊ヲ掃蕩シ渤海及黃海ヲ占領ス

内國ニ在ル陸海軍ハ要地ヲ守備シ陸軍ハ遠征ノ準備ヲ為ス

第二期 第一期海戰ノ景況ニ因リ三個ノ場合ヲ生ス

甲 我艦隊全ク目的ヲ達シタル時

乙 兩艦隊交戦ニ我レ渤海ヲ制スル能ハス 敵モ亦我近海ヲ制スル
能ハサル時

丙 我艦隊不利ニシテ敵全ク海ヲ制スル時

甲ノ場合ニ於テハ陸軍ヲ逐次渤海湾頭ニ輸シ決戦ヲ行フ

乙ノ場合ニ於テハ陸軍ヲ陸續朝鮮ニ進シ敵兵ヲ撃退ス

丙ノ場合ニ於テハ為ニ得ル限リ第五師團ヲ援ケ内國ノ兵ハ專テ國防ヲ完整シ

敵ノ東襲ヲ待テ之ヲ撃退ス

作戰ノ大方針

本方針ハ作戰上清露ニ國ニ對シ規定スルモノニシテ韓ノ兵力ハ之ヲ眼中ニ置カス
本方針ノ目的ハ敵ヲ朝鮮半島ヨリ擊退シ壓マテ此半島ヲ占領スルニアリ
此目的ヲ達スル成否ハ對馬海峽ヲ確實ニ占領シ得ルト否トニ關ス

我艦隊ハ清露兩艦ヲ各別ニ攻撃スルヲ勉メシム因テ作戰ノ經過ヲ二期ニ大別ス

第一期 第五師團ヲシテ朝鮮半島ニ作戰セシム

我艦隊ハ兩敵ノ艦隊各々ニ先テ速カニ進ミテ清露ノ艦隊ヲ攻撃ス

内國ニ在リ陸海軍ノ要地ヲ守備シ國防ヲ整備ス

第二期 第一期海戰ノ景況ニ因リ二個ノ場合ヲ生ス

甲 我艦隊全ク其目的ヲ達シタル時

乙 我艦隊目的ヲ達シ得ザリシ時

甲ノ場合ニ於テハ我艦隊ヲ退ケ對馬海峽ヲ守備シ要スルハ更ラ露ノ艦隊ヲ攻撃ス

丙ノ内國ノ防備ニ妨ケ無キ限リハ強大ノ陸軍ヲ朝鮮半島ニ進シ敵ヲ此半島ヨリ撃退ス
乙ノ場合ニ於テモ尚ホ我艦隊清露ノ艦隊ニ對シ對馬海峡ヲ守備スルヲ得ハ陸軍ノ動作
甲ノ場合ニ同シ若シ此海峡ヲ守備シ能ハサルハ為シ得ル限リ第五師團ヲ援ケ内地ノ兵
ハ敵ノ來襲ヲ待テ之ヲ撃退ス

御紙(6)

二十七年六月十日

○作戦方針圖を伊東長官へ電訓

電信(暗号)

左通聯合艦隊司令長官に傳達スシ

七月三日佐世保に於て本官より渡辺少佐に作戦方針、本官

より下附サレモト心得ラレハシ

同日

無長

釜山艦長

純流(6) 紙

二十七年八月十五日

○作戦大方針圖を伊集川長官へ電訓

電信時号

左三浦聯合艦隊司令長官へ傳達スルニ

右隸屬之陸軍ノ大兵ヲ進ルル時季既ニ後トナリ故ニ陸軍ノ作戦ノ
大方針ニ悉ルニ乙 揚子江ニ進ルル朝鮮半島ニ陸流兵ヲ進メ敵兵ヲ撃退
スルニ決ス但シ海我我ニ有利ナルハ或ハ陸海兩軍聯合シテ旅順口半
嶋ヲ占領スル計ニ出ルヤモ知ルカラス貴官ハ能ク此在國ヲ考酌セラレテ
ノ爲云

伊集川

部長

三浦聯合艦隊長

